

青梅市文化財ニュース

第404号

令和3年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

じょうこうばん 常香盤

671年6月10日、日本で初めて時計が用いられ、時を知らせました。このとき使われたのは「漏刻」と呼ばれる水時計です。この日本書紀の故事をもとに「時の記念日」が制定されました。現代の私たちは、機械式（あるいは電子式）の時計を使って時刻を知ることができます。時刻を知ることで私たちは時の流れを共有し、学校で授業をうけたり、電車に乗ったり、友だちと待ち合わせをしたりすることができるのです。

いま私たちが使っている機械式の時計は17世紀ごろにオランダで発明された振り子時計がその原型であるとする説が有力です。これは16世紀にガリレオ・ガリレイが発見した「振り子が一定周期で揺れる性質」をもとに考案されました。機械式時計が発明される以前にも時計は存在しています。ただし仕掛けが大掛かりだったり（日時計、水時計）、経過した時間を計るだけだったり（砂時計）、時刻があまり正確ではなかったり（燃焼時計）したようです。今回の文化財ニュースは時の記念日にちなみまして燃焼時計の一種であります「常香盤」を紹介します（写真-1）。

そもそも香を焚《た》く速度を時間の計測に使っていた例は、日本においては奈良時代の正倉院の頃までさかのぼるようです。また常香盤は「香時計《こうどけい》」「香盤時計《こうばんどけい》」「時香盤《じこうばん》」などとも呼ばれます。写真の常香盤は青梅市根ヶ布の天寧寺で今も使われているもので、一日の修行プログラムを進行させるために日の出・日没の観測と常香盤を併用して計時し鐘や太鼓の音に乗せて広範囲に時刻を知らせていました。さすがに現在はより正確に時刻を知る方法がありますので時計としてではなく長時間にわたって香を焚き続ける道具として使用しています。

それでは常香盤のしくみと使い方の説明です。

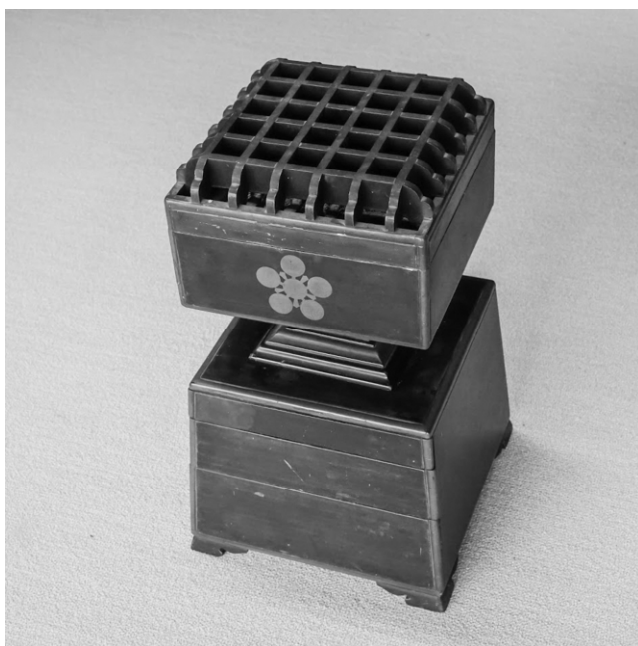


写真-1 常香盤

一番上には格子状のフタが乗っています。その下には木製の香炉、そして土台部分は3段の引き出しが付いており、引き出しの中には、道具や抹香をしまいます。まずは灰ならしを用いて灰を均等に広げます（写真－2）。次に木型を香炉の枠にのせます。木型には一筆書きの溝がほられていて、その溝から抹香《まっこう》を灰の上に落とします（写真－3）。さらに溝にヘラを差し込んで押さえつけます。上から押された抹香は灰の中に数ミリほど埋もれた状態になります。これを繰り返してゆくと香炉の灰全面に抹香の回路が出来上がります。

線香などで着火して使い始めますが、抹香の回路の途中に時刻を記した標識のようなものを立てたり、糸に鈴を結んで焼き切れると音が鳴るような仕掛けを用いたりして燃焼の経過時間を時刻に置き換えて時計として機能させていました（写真－4）。

しかし常香盤は火気を用いるため、火災の危険が常につきまといます。江戸時代の中期から後期にかけて機械式の「櫓時計《やぐらどけい》」が普及するにつれ、香の煙が時刻を知らせることは少なくなっていったようです。

（文責 沖 祐昭）



写真－2 灰ならし



写真－3 溝の上に抹香を落とす



写真－4 着火後の燃焼